
探偵学園 2年A組第5班

けにゃ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵学園2年A組第5班

【Nコード】

N2439Z

【作者名】

けにゃく

【あらすじ】

・・・日本、以前までは世界で最も安全な国とされていた。いや今でも世界で最も安全な国だ。

だが、その中身は不況、天災、政府の不安定さ、etc・・・。
色々な要因が複雑に絡まりあい犯罪件数が安全神話が囁かれていた頃の

数十倍、数百倍にもなってしまった。

警察や自衛隊は大きな事件や事故に狩り出され、一小市民の安全を保障する者は誰一人いなかった。

そんな時に現れたのが探偵養成学園。

この学園は、探偵を養成、輩出し、小さな事件や事故などを解決、阻止しようという政府が打ち立てたプロジェクトである。

このプロジェクトは見事に成功し、犯罪率は劇的に低下した。

この話の始まりはプロジェクトの成功から数年後から始まる。

普通の家に生まれ、普通に育ち、普通の学校に通っている青年
ひともせいじ
人見誠司。

彼が何か自分を変えたい、変わりたいと思ひ学園に入学。

そこから話が始まる。

第5班結成！【1】（前書き）

初めての投稿作品です。

表現など稚拙な所は多々ありますが、指摘などして頂けると嬉しいです。

では、どうぞ最後までどうぞお付き合い下さい。

感想なども頂けると嬉しいです。

第5班結成！【1】

両側に超高層ビルが立ち並び、その隙間を縫うように作られている路地裏の迷路のような道。

そんな人気のない道を全速力で走る男が一人。

「くそっ！捕まっただまるかよっ！」

悪態をつき、息を切らせながら走る男は時々、後ろを振り返りながら誰か付いてきていないかを確認している。

最初のうちは全速力だったが、走れば走るほどに速度は落ち、今は心臓と肺は悲鳴をあげ、手足の力は走るたびに抜けていく。

どのくらいの間走ったのか、記憶を掘り起こすことも面倒になった男は

とうとう走るのに必要な体力をすべて使い果たして

倒れこむように近くにある物陰に隠れた。

そして、そこで小休止。

追っ手を撒けたのか、しばらくしても誰も現れない。

「ふう……。」

自然と男から安堵のため息が漏れる。

「な〜に、安心しちゃってんのよ！」

ふいに上空から声が聞こえた。

男が上を見上げるとビルの2階の非常階段から女の子が自分の目の前に飛び降りた。

「黒!！」

「な、な、なっ!！」

男は上を見上げた時に見えた、とてもありがたい物の色を咄嗟に言っってしまった。

しまった、と思った時には女の子はすでに顔を真っ赤にしてこっちに突っ込んできた。

男は瞬時に立ち上がり逃げようとするが、男よりも素早い動きで女の子の手が男の手を掴んだ。

そして、女の子は男の懐に入り込むと、そのまま一本背負い。

「今日も絶好調ね!！」

キラッと、擬音が聞こえるくらいの眩しい笑顔で微笑んだ。

そして、気を失い地面にボロ雑巾のように転がっている男の両手を手錠で拘束。

「よっしゃー! 私の大事なところ見た罪で犯人を逮捕!!! さっ、学校帰ろーっと!！」

女の子は、大声で勝ち鬨どきをあげて男を肩に担いで学校へと引き返した。

そして、数時間後 . . .

「 . . . る!！」

「 . . . きろ!！」

「起きろー！ー！！！」

はっ、何かを思い出したように男は飛び起きた。

「黒！！」

そして、意味の分からない言葉を発して周りをキョロキョロと見渡した。

ベッドがたくさんあって、先生が使う大きい机が1つと長机とパイプイスがちらほらと見える。

見た感じ保健室だが、ちよっと豪華すぎるような気もするが。そんな事より、さつきからずっとこっちを見てくる人が二人、女性用のスーツに身を包んだ、いかにもキャリアウーマンのような女性と

さつき思いつきり一本背負いを喰らわされた女の子、その子の髪は金色で長く、その髪をツインテールにしているさらに、容姿端麗で、例えるなら人間ではなくて人形といったところか、

そのぐらいに綺麗な女子だった。

無意識のうちにならずとその子のことを眺めてしまっていた。

「あらやだ！転校生君はさつきからずっと私を見て・・・、惚れちゃったの？」

うん、容姿はともかく中身はちよっと残念な子だった。

あ、この子が黒だった子か・・・ちよっと得した気分。

そして転校生君とは、さつきまで逃げ回ってた俺・・・人見ひとみ誠司せいじとりあえず、黒の名前知らないし自己紹介と挨拶でもしようか。

「俺は、人見誠司、よろしくな。」

「私は、エミリー・クインよ！エミリーで良いわ、よろしくね誠司！」

金髪ツインテールの女の子の名前はエミリー、ちょっと残念な子だけど性格は良さそうなので仲良くやっていけそうだ。

「あつ、それとこっちは先生ね！」

「こっちのつて、失礼ねえ……。」

「まあまあ、気にしない！気にしない！」

キャリアウーマンな女性はどうか先生らしい。まあ、知ってたけど一応、再確認。

「じゃ、そろそろ教室戻りましょうか！昼休み明けの授業始まつちやうよ！」

あと、誠司の自己紹介は放課後のHRでするからね！」

ふむ、俺が学校から逃げ出したのは1時間目の始まる前だったしすぐに捕まったから、結構寝てたんだな……。

いや、それにしてもエミリーだっけか？可愛かったな、黒だったし……。

いやいや、俺の好みの色は黒ではなく、もっとこっぴんくとか白とか可愛い感じなので……

「こら誠司！早く行くよ！」

「あ、ああ……。」

なんか色々考えてるのバカらしくなってきたな……。
とりあえず、行くか！

誠司は大きく伸びをしてベツトを飛び降り脇に綺麗にたたまれていた自分の制服の上着を着てからもう一度体全体を使って大きな伸びをした。

今日からお世話になる学校、探偵養成学園。

その期待と不安を胸いっぱいにエミリーの後を追いかけた。

第5班結成！【2】

エミリーの後に続いて教室、2年A組に入った誠司は、クラスメイ
トの視線に晒されながら

自分の席を探すために教室をウロウロとしていた。

まさに、挙動不審の一言に尽きる。

エミリーに助けを求めようとしたが、俺の事なんかお構いなくさっ
さと自分の席に座って

周りの友達とだべり始めた。

なんて、酷い奴。

「おい、転校生！こつちだよ！」

救いの一声。

声の主を見ると、身長は180cmといったところか、体格はガツ
チリとしていて

鍛えられている風に見える。

「ありがとな」

そう言うと、声をかけてくれた奴の後ろの席に座った。

そこは、一番窓側の列の一番後ろの席だった。

隙間風が入ってきているのか、心なしか教室に入ったときよりも寒
気を感じる。

「俺は、神戸かんべ 良介りょうすけ、良介って呼んでくれ、よろしくな！」

「ああ、よろしく、俺は人見誠司だ」

一通り自己紹介と挨拶をしたところでいきなり良介は謝罪をしてきた。

「朝の事は、なんつーか、悪かったな・・・」

「はは、いいさ、気にしてない」

朝の事とは、つまり俺がいきなり追われたこと。

そう、転校してからの初めての登校日。

期待に胸を膨らませ朝のHRに出席したら、いきなりだったもんな・・・。

・・・朝のHR・・・

「え、今日は転校生がなんと2人も来ています！皆さん、歓迎しましょう！」

先生がそう言うと、クラスの皆はポケットから携帯や財布を取り出して鞆にしまう。

さらには、上着を脱いだり、準備運動を始めたりする奴もちらほら・・・。

一体、今から何が起ころうというのか。

「ほら、あんたたちも壊れたり、汚れたりしたら嫌な物は鞆に入れないさ。」

先生が俺たち2人にそう言った。

なんか、嫌な予感しかしないのですが・・・。
それっきり、先生は時計と睨めっこしている。

俺は、ふと横にいるもう一人の転校生が気になって、横を向いた。

その時の事はこれから何年たとうとも忘れる事はないだろう。もう一人の転校生の彼女は、髪は黒色のロング、白く透き通るような肌で

触つてもいないが、もちもちでしっとりしてそうな感じがする。

それに、微笑んでる顔がとても綺麗だった。

でも、その綺麗な顔の瞳は、何かを諦めた様な、愁いてる様な、そんな悲しい目をしていた。

そんな目が逆に完璧さの中に見える唯一の欠陥のようで

例えるなら、ミロのヴィーナスの不完全さの様な、そんな美しさで絵になっていた。

それが、こんな何の変哲もない教室ではなく、舞い散る桜の下とかでこんな顔されたら

俺はどうなってしまうのだろうか、そんなくだらない事を考えていた時に「それ」はいきなり始まった。

「さあ、学園式の歓迎だ！転校生の2人逃げなさい！！」

先生がそう言うともう一人の転校生はもう隣にはいなくてそこにいるのは状況の読み込めない俺だけだった。

「え？先生、逃げろって？」

「話聞いてなかったの？1分後にクラスの皆で追いかけるから逃げなさいって言ったじゃない！」

ほら、後40秒よ？」

うん、なんとというかスゴい歓迎の仕方だな。

意味が分からないがとりあえず俺は教室を飛び出して外に出るために階段を目指して走り出した。

「おーい！誠司く〜ん、いきなり無視ですかー！？」

おっと、完全に回想モードに入ってた良介の話をまったく聞いてなかった。

「悪い、もう一回言ってくれないか？」

「だから〜、もう放課後のHRで誠司、自己紹介まだだろ？だから、してこいって言ってたんだよ！」

はい？放課後のHR？

俺は回想で2時間分の授業を使って、しかもその授業の記憶もまったくないという事ですか？

都合の良いような気もするが事実なので仕方ない。
俺は席から立ち上がり先生のいる教壇に向かった。

第5班結成！【3】

教壇に登り一度、深呼吸。

教室の中は物音1つない、誰もいない訳ではなくて

今から始まる俺ともう一人の転校生の自己紹介に全力で耳を傾けてくれているからだ。

これは、失敗できないな……。

そして、もう一度、深呼吸をしてゆっくりと口を開く。

「え〜と、俺の名前は人見誠司、前の学校はこの学園と同じ県内にある、

普通の公立の学校です。

探偵の事、何も知らないですがやる気だけはあります！

こんな奴ですが、皆さんよろしくお願いします。」

話し終わった後の、一瞬の沈黙に失敗したかと思わされたが

何の心配もなかった、すぐ後には皆の拍手とよろしく、という声でクラスが賑わった。

その次に、教壇に登ったのもう一人の転校生。

やっぱ、綺麗だな・・・いや、そうじゃなくて俺も自己紹介聞かないとな。

後ろ髪引かれつつも、仕方なく自分の席に戻って聞く体勢に入った。やがて、もう一人の転校生が淡々と話し出す。

「ほしかわ星川 りん凜、よろしく」

なんていうか、無愛想な奴だな、こんなに綺麗なのに。

じゃなくて、もう一人の転校生、星川のせいで教室は一気に冷え切った。

誰か、この居心地の悪い空気を何とかして欲しい。

「え〜と、2人とも自己紹介ありがとね、さて、2人には今すぐ決めて欲しいことがあるの」

先生、ナイスフォローだぜ！！

俺は心の中で叫んだ。

「この学園は班体制を取っていて実習科目と実践科目、つまり、
本当の探偵の仕事をする時には

班で行動してもらうので、班の人数は大体、3人が4人ぐらいで
構成されているわ、それで、君たちには・・・」

そこで、先生の言葉を遮る様にエミリーが立ち上がって発言した。

「で、先生は、この2人を私の班に入れようって事ですか？」

エミリーの目は、さっき保健室で見たときと違って、
非難する様な怒っている様な、そんな目で先生を睨みつけていた。
その迫力は凄まじく、エミリーの周りのクラスメイトたちはすぐに
その場から飛びのいた。

でも、先生はそれに一步も引かず反撃した。

「そうよ、あんた、いつまで経っても1人じゃない！だから、この
機会に・・・」

「余計なお世話よ！！」

再び、先生の言葉を遮ってエミリーは叫んだ。

「ちょっと、エミリー！待ちなさい！話はまだ終わってないわ！」
そのまま、教室を飛び出したエミリー。
そこで今日の放課後のHRはお開きとなった。

「なあ、良介、エミリーのやつどうしたんだ？」

「まあ、色々あって、・・・な？」

良介も何やら浮かない顔をしている。
エミリーには、何か人には言えない事情があるのか。
あの笑顔の裏側にどんな隠し事をしているのか気になった。

「ちょっと、人見君、いいかしら？」

仕方なく、帰宅しようとしたところに先生からお呼びがかかった。
無視するわけにもいかず、渋々、先生のところへ向かう。

「何の用事ですか？先生」

先生は何も言わず、手招きだけをした。
俺に付いて来いって意味かな？

とりあえず、先生の後を付いていく。
階段を上り、さらに上り、ついには最上階まで来てしまった。
先生はポケットから鍵を取り出し、最上階の階段を上りきった
ところにある扉を開ける。

扉を開くと、夕日に照らされてオレンジ色に染め上げられた屋上。
周りには何もなく、ただ落下防止のフェンスだけが張り巡らされて
いただけだった。

先生は、そのフェンスに手をかけて校内を見渡す。

俺も先生に釣られて同じ動作を取った。

「エミリーはね、とても傷ついてるの」

先生は急に話しました。

「細かい事情は、私から言えない、でも傷ついてるのは確か、その傷のせいで彼女は人との交流を避けているわ」

人との交流を避ける、か……。

対人関係で何かあったのか？

「だから、新しい転校生のあなたたちにエミリーを変えて欲しくて、救って欲しくて……」

先生は淡々と話しているように見えたが、夕日に輝く一筋の涙を俺は見てしまった。

生徒の為に涙を流せるいい先生だな、と思った。

「ごめんね、理由も何も話せないのに、迷惑だったわよね……？」

俺は、ふう、とわざとらしく深くため息をついた。

「で、俺は何をすればあいつを救ってやれるんです？」

先生は、とびつきりの笑顔でありがとうと言って俺を抱きしめた。いや、先生、俺の方こそありがとう。

あなたのその柔らかくて大きくて素敵な物が俺の顔を覆っている。今までの人生で一番の至福の時かもしれない。

「あつ、急にごめんね、つい嬉しくて・・・」

先生はそう言うと、俺を胸から解放した。

名残惜しかったが仕方ない、それにこれ以上されたら暴走してしまいそうだった。

「エミリーはね、人と関わる事を積極的に避けているわ、だから、なんとかして彼女の

班に入って欲しいのよ」

「で、どうすれば班のメンバーに認めて貰えるんですか？」

「まずは、新しく参加するメンバーの参加表明とその班のリーダーの同意、

これでOKだわ

で、エミリーの班はエミリーしかないから班のリーダーはエミリーね」

これは、中々難航しそうだな。

人との関わりを積極的に避けているエミリー。

そのエミリーをなんとか説得して班のメンバーになるのか。

「つまり、エミリーに認められればメンバーになれるって事か・・・」

「まあ、そうなるわね」

目標は出来た、だが、その目標をどうやって達成するかだ。

まあ、今は深く考えても仕方ないか、明日とりあえずエミリーと話してみよう。

「あ、それとね、凜ちゃんも一緒に班に入れてあげてよね！それじゃ、よろしくうー！」

先生は、それをいうと逃げるように屋上から消えうせた。

あの無口な奴をどうやって説得しろと？

それに、そいつもエミリーに認めさせなきゃいかんのか？

無理じゃね？俺は、心の中で悪態をつきながらもやる気は満タン、これっぽっちも失ってない。

何故なら、いつも通り、普通、そんな日常に耐えかねてこの学園に来たのだ。

初っ端から、面白い展開になってワクワクしているのだ。

「さって、明日からエイミー攻略作戦開始だな！」

そう言って、俺も屋上から出た所で思い出した。

屋上の鍵どうすればいいの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2439z/>

探偵学園2年A組第5班

2011年12月9日01時42分発行